アンドレ・チエン／ジャン＝ポール・ベトベーズ著　井川浩訳

100語でわかる中国【文庫クセジュ964】

〈白水社、二〇一一年一二月、一四四頁〉

他国を理解する時、その国との政治、経済、文化、歴史、民族、言語などの結びつきを見据えることが重要であることはもちろんだが、じつは地理関係、それも互いの遠近関係もさることながら東西南北の位置関係が微妙な影響を与えているようにも思える。

中国は日本から見て海を越えた西に位置している。そこで日本は、意識することなく東方からの視点で中国を眺めてきた。だから、我々の中国理解のどこかに、人口に膾炙されている聖徳太子の故事に倣うわけではないが、「日出ずる所」から「日没する所」を見るような意識はなかっただろうか。ところが著者の二人はフランス人であるがゆえに、西から遥か東方を望見することになる。いわば著者らフランス人にとっての中国は、地平線に上る朝日の向こう側に位置することになる。

この位置関係の違いが、同じ中国を論じながらも一種の〝誤差〟を生むのではないか。

本書は「序」で、中国の現状を「長いあいだ、世界から仲間はずれにされ、しばしば辱めを受けた大国、中国が遅れを取り戻そうとしている」と捉え、であればこそ「経済成長、金融、イノベーション、環境、政治論争の分野で何が起きているか」、さらには「世界の安定にかかわる状況を把握しようとするとき、中国という国をよりよく理解しようとする試みは決定的に重要である」とする。おそらく、これが本書執筆の動機だろう。

本書は「第一章　広大な国土」「第二章　悠遠・激動の歴史」「第三章　多岐多様な指標」「第四章　複合的な経済」「第五章　近年の試み」「第六章　今後の課題」で構成されている。麻雀、風水などの伝統文化から「中国を理解するうえでの最重要キーワードかもしれない」と記す「安定」まで、「100語でわかる中国」の書名が示しているように、フランス人に「中国という国をよりよく理解」させるべく、簡にして要を得た解説がなされている。

もちろん、個々の項目の解説には首肯できない点もないわけではないが、たとえば第二章の近現代部分を「孫文（孫中山）」「国民党」「毛沢東」「五・四運動」「長征」「大躍進」「文化大革命と四人組」「中国共産党」「鄧小平」「近年の中国共産党指導者」「国際機関への加盟」で構成している点から、著者が一般フランス人にどのような中国近現代像を与えようとしているかが判るような気がする。おそらく同じテーマを与えられた場合、日本人が選ぶキーワードも記述内容も、著者らとは違ったものになるに違いない。

本書によってフランスおける中国理解を知ることは、我われ日本人の中国理解が抱えているであろう〝誤差〟を確かめ、正すことに繋がるように思える。

（樋泉克夫）